

## 加藤 晃先生との思い出

東北大学情報科学研究科 教授

宮城俊彦



加藤晃先生が平成24年6月10日、午前10時48分、享年84歳にて逝去された。今日の土木計画学の隆盛への途を開いた第一世代の巨星がまた一人去って行った。それにもまして、私を学研の道へと導き、私の成長を誰よりも喜んで頂いた師を失った悲しみは他人には推し量れないであろう。

加藤研究室は非常に人気の高い研究室であった。昭和40年代になって新都市計画法が施行され、都市計画に対し、新しいものを創造するという息吹を感じていた学生が多かったからに違いない。“都市をplanningという”，何か従来の土木工学にはないデザインの創造性と未来への希望に自分たちも参画する夢を描いたのである。私個人で言えば、土木工学は私の第一志望学科ではなかったのに、入学後も講義に対して真面目に取り組むことはなく、再度、医学部を受験しようと悶々とした学生生活を過ごしていた。定期試験こそ一夜漬けでパスしたが、土木工学の学問が身に着いたとは決して言えないお粗末な学生であった。それを変えたのが加藤先生の都市計画の授業であった。土木にもこのような面白い分野があったのかと初めて感じた講義であった。

加藤先生の講義は、本人が各種の都市計画に参画していたこともあり、実例を踏まえた実践的なものであり、教科書はあって無きがごときであった（私が学生だった頃は他人執筆の教科書を使っていた。）加藤先生の講義の特長は重要なポイントを的確に学生に伝える点にある。私は教員になったあとも度々加藤先生の講義には出席したが、名著「都市計画概論（共立出版）」の執筆後は、単に実践的なだけでなく、歴史的な考察も加わり、体系化され、洗練されたように感じた。講義中の学生の目は輝き、先生に集中しているのを肌で感じた。まさに名講義である。卒論研究での研究室選びの話に戻すと、私は水理学を選ぶか、都市計画を選ぶか迷っていた。土木の専門は真面目に勉強しなかったが、数理的なアプローチは元来好きであり、水理学講座のテーマの一つであった乱流理論にも興味を持っていた。結局、都市計画を選択することに腹を決め、くじ引きに勝って晴れて加藤研究室の門をくぐることになった。

私が大学院の2年生の頃であったと思う。先生は1年間の予定で留学された。出発の直前に、「君は大学に残って助手になる気はないか。君は研究者に向いていると思う」と持ちかけられた。私

は、卒業後はシンクタンクに就職したいと考えており、自分が研究者向きであるなどとは一度も考えたことは無かった。実際、土木の専門科目も真面目に勉強はしていなかったのだから。先生が何を根拠にそう判断されたのか、一度お聞きしたいと思っていたのだが、今となってはそれも叶わない。

私は、修士論文では「需要供給均衡原理に基づく交通需要予測手法の開発」をテーマにしようと考えていた。このテーマを思い立ったのは、Martin Wohl and Brian Martin 著のTraffic System Analysis for engineers and plannersという本を読んだのが切掛けである。この本を4年生の卒論研究をしている頃に加藤先生の部屋で見つけた。加藤研究室は実にオープンで、加藤先生の部屋は学生も自由に出入りできた。先生は、外部の委員会が多忙で研究室を留守にされる時が多かったため、私は先生の部屋に入っては外国文献や本を読み漁っていた。それは大学院進学後も続いたが、その頃読んだ文献で後の研究に役立つものは多い。当時は、インターネットも普及していない時代で、マイクロフィッシュで閲覧できる論文やジャーナル論文を複数取りまとめたものを文献サービス会社が販売していた。結構高価であったが、加藤先生は、自分の研究には直接関係ないものまで多数購入していたのである。

交通需要予測手法については当時助手であった岡先生を中心に卒論ゼミで勉強したが、細かい収束計算だけに力点をおいた四段階推定法に私は少なからず疑問を抱いていた。そうした中で、Martin Wohl and Brian Martin の本は経済学の需要・供給原理を交通需要予測手法に取り入れるべきであることを主張し、また、交通プロジェクトの評価手法としての費用便益分析の重要性を説いている点で、当時の私には実に新鮮に写った。ただ、概念だけで具体的な手法には言及していなかったため、これをテーマにしようと考えたのである。学部学生の頃には知らなかったが、実はこの本を当時加藤先生は翻訳中であり、それは翌年鹿島出版会から出版された。恐らく先生も当時の交通需要予測手法には疑問を抱いており、経済原理に基づく手法の確立の必要性を感じていたのではないかと推察される。それは、後に、経済分析に明るい森杉壽芳先生を岐阜大学に招聘したことからも伺い知ることができる。

私は、後に、交通ネットワークにおける需要・供給分析をテーマ

に博士学位論文を京都大学に提出ことになる。このテーマはMartin Beckmann教授、佐佐木 綱教授の影響を色濃く受け、都市計画とは無縁の数理解析を中心にしたアプローチであるが、今、思いかえせば、加藤先生の目に見ない糸に導かれ、そこに辿りついたようにも思える。

## わが人生の師、加藤晃先生を偲ぶ

岐阜大学名誉教授

竹内伝史

2012年06月10日、日本都市計画学会中部支部初代支部長、加藤晃先生(元岐阜大学学長)が逝かれた。3年半ほど病床に伏せられ、最近はお見舞いも叶わぬ状況だったから、それなりの覚悟は出来ていたつもりだが、逝去後ひと月、しみじみ大きな欠落感を味わっている。振り返れば、日本の都市計画にとって中部地域にとって、そして私自身にとっても、実に大きな人であったと思う。

私は岐阜大学の卒業ではないから、加藤先生の講義を直接聞いたことはない。また、岐阜大学に職を得たのは、加藤先生が学長を退かれた後で、先生が設立に尽力された地域科学部の創設のときであった。しかし、先生から新学部(教養部改組)構想については、よくお聞きしていたので、土木工学の枠からとび出して、広く社会科学のみならず人文系の人たちとも交流し新しい総合科学の領域を切り拓く仕事を先生から指示されたと思って、新学部の講義体系確立に邁進したものである。

私が、先生に初めてお会いしたのは大学院生の頃(1968)で、東京の当時はしりの大型コンピュータを使ったコンサルタント会社においてであった。私を連れて行った私の指導教授が「この人が今有名な、コンピュータを駆使する少壮教授の加藤さんだ」と紹介してくれたのを思い出す。加藤先生は、退官の折に自ら著わされた「岐阜大学での思い出」の中で、「私の研究能力と研究への姿勢は理論よりも実務的な方に向いていた」と言っておられるが、当時の最先端の課題、交通配分の考え方の実務的定着と解法アルゴリズムの開発に取り組んでおられたのだと思う。この主題は「道路網における交通流解析」と題する論文となり、土木学会論文集(129号)に掲載され(1966)、同年論文賞候補になった。なお前年、先生はこの主題で京都大学から工学博士の学位を取得され、37歳で教授に昇任している。

また、1958年、先生が講師に昇任し最初に担当した講義は「都市計画」であるが、先生はこれを「私の専門は交通工学であったが、まだ独立した科目と認められていなかったので、授業担当は都市計画ということになった。」「都市計画は市民生活と直接につながっており、…大学院や助手で3~4年研究したからといって講義ができるほど生やさしくない。それでも…勉強しながら新米の都市計画の講義を持つことになった。」と記している。謙遜しながらも、若くして斯界の造詣に並々ならぬ自信と闘志を秘めておられ、後に名著教科書「都

加藤先生からの薫陶、励まし、そして研究以外の思い出は、この少ない紙面では語りつくすことはできないが、故人偲び、この拙文を送りたい。

市計画概論」(1977、共立出版、現在は改訂して「新・都市計画概論、改訂2版」(2006、竹内との共著))を著わされる片鱗が窺える。また、1973年には、岩波書店の現代都市政策講座(VIII 都市の装置)に「自動車と人間」を書いた。工学者としては稀有の例であろう。

こういった学究姿勢の先生を、実務社会は放ってはおかない。岐阜県では1970年代中期から総合計画、都市計画等の審議会委員を勤められたが、80年代に入ると国の道路審議会、中部圏開発整備審議会、運輸政策審議会、日本道路公団等の委員を勤められ、中部圏の社会基盤整備における方向付けに大きな寄与をされた。とくに、当時混迷を極めていた名古屋都市高速道路問題では、計画見直しの難業を解決に導かれた(1983)。また、名古屋交通問題調査会(1981~)では専門部会長、後に会長として、地下鉄や基幹バス・ガイドウェイバスの実現に寄与され、名古屋のみならずわが国の公共交通政策を主導された。さらに、1986年、中部国際空港の整備実現のために設立された(財)中部空港調査会の発足に当たっては、立地部会長の重職を担当され、立地選定をまさに無事に達成され、後には専門委員長として整備の早期実現に大きく貢献された。

一方、先生は岐阜大学長退官後、(財)名古屋都市センターのセンター長に就任されており(1995~2005)、都市計画における学会と行政の連携に貢献された。学会活動においても、1990年、日本都市計画学会初の支部である中部支部の設立に奔走され、これを達成、初代支部長を勤められた。また、先には始動期の土木計画学研究委員会(土木学会)の委員を二度にわたって(1967~71、75~78)勤められ、斯研究委員会の隆盛に先鞭をつけられた。また、1992~97年には日本都市学会会長を務められている。先生のこういった学会の社会貢献成果の拡大に対する大きな寄与に対し、土木学会から1998年、日本都市計画学会からは2000年、学会功績賞を受賞された。

先生に従って、指導を受けつつこなしてきた仕事は、振り返れば数に限りがない。私の脳裏に浮かぶことを書き連ねただけでも、先生の偉大さは上述の通りである。あとに続く者、相談相手を失って、まさに「途方にくれる」の感がある。力を合わせてこれに当たるのが、先生の遺志に報いることであろう。衷心より加藤晃先生の冥福を祈る次第である。